日本行動計量学会会報

第　14　号
1978年3月8日

日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

これからの行動計量学会

林　知己夫

学会が創立されてから4年を経過した。どのような意図で学会が創られたか、その意図はいま変更すべきか、その流れに沿って発展させるべきか、こうした問題を問い直してみることは重要なことである。組織というものはひとたび出来上り形を整えてくると惰性のままになってしまうものである。こうした惰性と硬直性のアンチテーゼとしてこの学会は出来た筈であるから、前記の様な自省は常にしなければならない。

学会は、会員が作り会員の考え方によって運営さるべきもので、これを、より容易・活発にするのが学会の役員組織の仕事であることは改めて言うまでもない。学会が盛んであるということは優れた独創性ある研究がこれを母体として生まれ育つことであり、多くの人の活気ある参加によって一層それが発展し普及されることにある。常に新しい困難にぶつかりこれを克服するように力を盡くすことが大事である。学問においては不精と怠惰は最大の敵である。

行動計量学ではものの見方（視点）の設定が第一の肝要点である事は、これまで繰返し述べてきた。この視点を原点に現象に切り込んで有用な情報を引き出して行くために何を如何にすべきか、これに心を凝らさなければならない。過去の学問の方法の枠の中で考えていたのでは、行動計量を称える意味はない。過去の学問方法は、それなりのルールに従って構築された文化遺産のようなものであると観ずるわけで、これをポテンシャルエネルギーとして問題解決に進むところに新しい方法と方法論が生じてくることになる。それでは問題解決の問題とは何か。これを一般的に規定しきることは困難なことである。これは各自の関係する分野において何を解決することが——勿論、計量的立場に立つ意味においてである——肝要であるかによって決まるものであろう。解決の第一歩は全般を見透しての問題の形作りがあげられよう。

行動計量学の視点を心中深く蔵して現象を計量的に取扱うことの重要性の自覚は、新しい方法の創造につながったであろうか。私はいまだ胎動の状態と言わざるを得ない。これからである。しかし漫然と「これから」では出来上がるものではない。胎動を具現化するために力を極めなければならない。一層の自省と努力を重ねる必要があろう。私事に亘り恐縮するわけであるが、私としても行動計量という視点を自覚したあと、今までとは異なった新しい方法を作りあげることをしていない。従来の枠の中での研究を発表していることが大半である。しかし、いま渾沌の状態からやや形の見え出してきたものがある。これは人間の心の奥を探る計量的方法を作りあげることである。フロイド関連一派のような無意識深層ではなく中層のところの意識—無意識の接点のようなところである。これが人間行動のホンネとして重要な働きを持つと予想させるデータが多く出てきている。これまでの社会調査法は表面的な意見をとることに終始した方法である。発生的に見て已むを得ないところと思われるが、ここを突破し、分析の在り方を講究し、何とかなるのではないかと思い出してきた。要はデータのとり方と分析の方法に盡きるわけであるが、新しい視点に立たねば出来ないことと思う（コロンブスの卵か）。多くの方々の新しい方法胎動の具象化を望みつつ。

（日本行動計量学会理事長・統計数理研究所長）

立教大学で第六回総会開催
九月六日から三日間

昭和五十三年度の日本行動計量学会総会（第六回）は、九月六・七・八日の三日間を会期として、立教大学で開催されることになりました。

実行委員長は池田央氏（立教大・社会）で、目下実行委員会を中心にプログラムの具体案を検討中です。現在、特別講演に「エネルギー問題」、「災害」を、シンポジウムでは「因果性」が題目として予定されています。また特別テーマには「質と量」、「文化の計量」、「予知と予防」などが候補にあがっています。

会員の皆さんには四月に総会の実施要領が送られる予定です。研究発表の申込締切りは五月、発表論文の提出期限は七月となっています。ふるって発表申込をしてください。

人工知能国際会議
（一九七九年）で研究発表を！

第6回の人工知能国際会議（The 6th International Joint Conference on Artificial Intelligence, 略称IJCAI-79）が、来年（昭和五十四年）八月二十日から四日間、東京で開催され、本学会はこれを協賛することになりました。詳細は追って通知される予定ですが、本学会の会員がふるって研究発表をしてくれるよう望みます。

同会議は、自然言語処理、知能ロボット、自動設計、視聴覚情報の認識・理解、データベースの知的アクセス、知能的コンピュータ・システムなど、いわゆる〝人工知能〟の基礎と応用に関する研究の促進を目的に、過去五回開かれています。思考、推論。学習、問題解決などを研究内容としますので、単に工学分野と限らず、数学、心理学、言語学、行動科学、生命科学、医学などを包含する学際的な研究領域で、〝行動計量学〟との関係は深いものがあります。

（同会議の問合せは電子技術総合研究所パターン情報部（西野博二氏）へ。所在地は〒一〇〇　東京都千代田区永田町二―六―一・Tel〇三（五八一）〇四四一です）

会議議事録

◇理事会（二月四日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　九名

1. 昭和五十三年度の総会（第六回）は九月六日より三日間を会期として立教大学で開催する。
2. SMC主催のサイバネティクスと社会国際会議（一九七八年度）に本学会の会員が多数発表するよう学会として積極的に働きかける。
3. 第6回人工知能国際会議（略称IJCAI79）の組織委員会より同会議に対する協賛の依頼について、本学会はこれを受諾し協賛することにした。
4. 各種委員会報告（和文誌、欧文誌編集委員会、運営委員会）

◇運営委員会（一月三十日）
於　統計数理研究所
出席者　運営委員　九名

1. 各種の係を次のように担当することとする。

『月例シンポジウム』柳井晴夫（千葉大）、脇本和昌（岡山大）、小谷津孝明（慶大）、大隅昇（統数研）、林峻一郎（慶大）

『講習会』梶田叡一（日女大）、開原成允（東大）、丸山久美子（青学大）、岩坪秀一（電総研）

『小グループ研究会』白崎和夫（東大）、江川清（国語研）、近藤邁（日立）

『広報』西川泰夫（上智大）、今井四郎（北大）、杉山明子（NHK）、水野欽司（統数研）、

2. 月例シンポジウム「教育データの計量」（オーガナイザー脇本和昌氏）を四月下旬に関西地区で開催する。
3. クラスター分析を内容とする講習会を五月末ないし六月に行う。例年この時期に行っていた「多変量解析」の講習会は九月以降に開催する。
4. 小グループ研究会について四月に活動状況を調べ、活動費用補助を行う。
5. 会報について増ページを含む今後の編集方針について検討を進める。
6. 事務局を中心に会員名簿発行の準備を進める。

Behaviormetrika

欧文誌◇編集雑感……

松原　望

本学会の欧文誌も創刊以来現在まで4号をかぞえるようになった。その間、会員諸氏の御理解と御支援、また編集委員各位の色々な面にわたる努力で、ようやく学会の基幹的な役割を果すまでに成長し、私としてもほっとしている。現在編集委員長の印東太郎氏がアメリカに御滞在中のため、氏に代って感謝とお願いを申し上げたい。

原稿の応募状況も年間6・7点というところで、一年一回の発行（5点の論文を掲載）にはほぼ十分という所であるが、審査の段階で若干減少することを考えると、さらに数点の論文が欲しいところである。ただ、自発的投稿（従来は、投稿勧誘もせねばならなかったが）が、少しずつ増加しているのは、心強いところである。一層ふるって、御投稿されんことを。

それについては、編集幹事としてお願いしたい点は次のようなことであるので、十分お守りいただきたいと思う。

全般的に、編集要項が徐々に守られなくなってきており相対的に編集業務が増大して編集委員に負担が重くかかりつつあるので、投稿に際してはよく編集要項（英文）をお読み願いたい。気付いた点、1.文献引用方式厳守。2.文末文献の年代、頁、年度、巻号の確認。単行本と論文の区別（イタリックの指定など）。3.脚注は、原稿の中では末尾にまとめる。4.キーワード欠落。5.図表は別にまとめ、氏名を付す。6.原稿は二点提出。7.アブストラクト提出、等。編集要項に著しくはずれる論文は、やむを得ず返送して再提出をお願いすることもあるので御協力をお願いしたい。その他の点として、複雑すぎる添字はなるべく御遠慮頂くこと（やむを得ない場合はもちろんこの限りでない）、当然の事ながら、校正段階での大幅書き替え、図表変更（特に図は凸版の起し直しとなり印刷代に関係してくる）は、間違い手違いの原因になるので、重大なもの以外は極力お控え頂いている。

英文（正確には欧文）の体裁もさすが投稿者の諸氏は見事なものが多いが、時々？をつけて考え込んでしまう「名文」も（何カ所か）ある。これは規則ではないが、提出前に慣れた人やその国の人に目を通してもらうとさらに良くなるのにと思うことがしばしばある。時によっては、この作業（ただし著者と打ち合わせて）に手間がかかることが多く、閉口することも一再ならずである。私案であるが英米人で読んでくれる人（有償にして）をあっせんするのはどうかとも考えているが、会員諸氏の考えはどうであろうか。現にそういう依頼が時々あるので……。

考えてみると、あの名表紙、名マークで発刊してから4、5年たつ。人間の精神活動にも山谷があり、学会も長期にはそういうこともあれないのであるが、学会誌というものはそういう中でそれとは一切おかまいなく、時には朴訥に黙々と来る年も来る年も時を刻みつつ進むもののようである。学会誌はそういう意味で最も信頼しうる学会事業の一つであらねばならない。どんな時でも一時休止ということはない。苦労であり閉口もするが私はやりがいのある仕事と思っている。といっていつまでも永久にというのでは困るけれども……。皆様の御協力に感謝しつつも、今後もよろしく。（筑波大社会工学系・欧文誌編集幹事）

学会だより

○第四十二回日本心理学会　十月十四～十六日　九州大学
○第四十六回日本統計学会総会　七月十九～二十一日　東北大学
○昭和五十三年度科学基礎論学会総会　六月十～十一日　東京工業大学
○一九七八年春季研究発表会　オペレーションズ・リサーチ学会　五月三十一日～六月一日　札幌市教育文化会館
○第五十一回日本社会学会　十月二十一～二十二日　松山商科大
○第二十回日本教育心理学会　九月二～四日　横浜国立大学

◎会員（二月二十八日現在）
（正）七六九人（準）一五二人
（賛助）三一法人

行動計量学

和文誌の編集から……

野元菊雄

やっと五巻一号を送り出してほっとしているところですが、この編集終了以後に集まった投稿の数は九編に及んでいて、この点では大変喜ばしいことと思っています。

この九編のうち一編を除いては審査が終わっています。審査終了の八編中六編については一応編集幹事会で話し合いをしました。結果は掲載可三編、保留二編、不可一編です。あと二編の審査終了分については、次回の幹事会で討論する予定です。この会で最終的に掲載論文を決定して実際の原稿整理から印刷へと、三月には始動することとなります。五巻二号にはこの投稿論文のほか、四巻二号に出た、展望、西里静彦氏の「尺度法とその関連領域(2)」を掲載し、また、第五回総会の研究発表などの座長報告、これに学会活動報告などを予定しています。

年二回の発行ですので、投稿してから掲載までに時間がかかりすぎる、というご批判もあるようです。これは、発行回数を増やせばある部分は解決できますが、それには編集幹事の事務量が大きくなってしまうということもあり、それは奉仕するとしても、学会の会費を値上げしなければならなくなるという問題もあります。会員数が増加すれば、ある程度は学会の財政がうるおいますから、会費値上げなしでも、発行回数の増大または、一冊のページ数を増すことも可能でしょう。

審査のすんだ論文は、もちろん何の修正もなしにそのまま掲載されるものもありますが、多くは、審査者（査読者、いわゆるレフェリー）の意見によって修正を求められます。この査読者と筆者との中間に立って論文や手紙の仲介をするのは編集幹事です。

前は審査者は、論文の筆者名を知っていて審査をしていましたが最近筆者名を明らかにしないことにしました。したがって、審査者・筆者ともに通信の相手がだれであるかはわからない、というのが建前となっています。審査者には忙しい時間を割くなど、ご協力をお願いしております。かつては論文の返送費までご負担願ったこともありました。

審査の結果掲載された論文の筆者の方はこのようなこともお考えになり、また、ただ購読されるだけの会員の会費というもののうえに立って掲載されるのだということもお考えになって刷り上がり八ページという制限を極力守っていただきたいと思います。この刷り上がりは、図表を含めてのことで、学会所定の原稿用紙（送料とも実費で負担願います）五百字づめ三十二枚以内となります。これらの執筆要綱は和文誌の表紙裏に掲載してありますのでご覧下さい。

採否決定はなるべく早くしたいとは思っていますが、編集幹事会はもっとも短い間隔で二か月ですので、投稿の日との関係で一律には行きません。大体、投稿後一回目の会で審査者を決定し、二回目の会で、審査の結果により編集委員会としての最終決定をすることになりますから、四か月は最大必要となり、もっとも早くて二か月と少しということもありましょう。審査者の決定を幹事間の電話ですませる試みも少々してみました。これで少し早くはなりますが、やはり最終決定は会議を経なければならないと思います。

何といっても学会誌の質向上には、投稿論文数が多いことが必要ですので、会員の方に振ってご投稿下さるようお待ちしています。

（国立国語研究所・和文誌編集長）

事務局から

▼本年度も残りわずかとなりました。学会費（正会員は三千円、準会員は二千円）を未納の方は大至急ご納入ください。送金は振替（東京八―一四八〇五六、日本行動計量学会）でお願いします。

▼和文誌「行動計量学」の原稿用紙をご入用の方は、代金および送料を振替でお送りください。代金は一冊（五百字詰五十枚）三百円、送料は一冊二百円、二冊三百円、三・四冊六百円です。

▼海外在住、または海外留学・出張の方で現地への学会誌の送付を希望される方は、そのむねご連絡ください。